

平成18年度業務実績に関する追加提出資料

平成19年8月

独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構

追加提出資料一覧

I.	主要事項に係る計画と進捗状況	P1
II.	個別事項	
1.	銅谷・柳田の2研究ユニットの評価について（評価表1.（1）①）	3
2.	現在の研究ユニット全体における職員数の内訳（評価表1.（1）③）	4
3.	ワークショップやセミナーの開催状況について（評価表1.（3）②）	6
4.	施設整備に関する函面（評価表1.（5）②）	7
5.	造成工事について（評価表1.（5）②）	14
6.	COP I, MACOの活動状況について（評価表2.（1）①）	15
7.	規程の見直しについて（評価表2.（1）②）	17
8.	ラスパイレス指数について（評価表2.（1）②）	18
9.	事務職員の専門能力向上のための措置について（評価表2.（1）⑤）	19
10.	随意契約について（評価表3）	20
	参考資料	
	・ ワorkshopアンケート（抜粋）	
①	一分子解析	21
②	OCNC2006	22

I 主要事項に係る計画及び事業の進捗状況

	平成 17 年度 (9月～)	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度以降
大学院大学 設立の準備	<p>大学院大学の教育研究分野・組織体制・教員の人事制度の検討</p>	<p>大学院大学の組織規程の検討</p> <p>学長及び主な役員候補者に関する調査</p> <p>大学院大学の設置形態等の課題について一定の方向性【H17】</p>	<p>大学院大学の組織規程の検討</p> <p>学長及び主な役員候補者に関する調査</p> <p>大学院大学の設置形態等の課題について一定の方向性【H17】</p>	<p>大学院大学の組織規程の検討</p> <p>学長及び主な役員候補者に関する調査</p> <p>大学院大学の設置形態等の課題について一定の方向性【H17】</p>	<p>大学院大学の組織規程の検討</p> <p>学長及び主な役員候補者に関する調査</p> <p>大学院大学の設置形態等の課題について一定の方向性【H17】</p>
研究活動	<p>科学技術分野の大学院教育に関する会合の開催</p> <p>科学顧問グループの創設</p> <p>北米・欧州の大学院教育に関する状況調査に着手</p> <p>特別アドバイザーの任命</p> <p>クリス・タン博士の任命</p>	<p>PI 12 人程度</p> <p>PI 13 人 (うち外国人6人) <19.3.31 時点></p> <p>「霊長類脳研究」に係る取組</p> <p>国内WSの開催 国際WSの開催 → 課題等の検討</p> <p>「数理生物学」に係る取組</p> <p>関連分野のPIの採用 国際WSの開催準備</p> <p>研究者養成活動</p> <p>琉球大学との協定締結 8つのWSの開催</p>	<p>PI 17 人 (うち外国人9人) <19.7.1 時点></p> <p>PI 20 人程度</p>	<p>PI 20 人程度</p>	<p>PI 20 人程度</p>

大学院大学の設立
 ◎ PIが50人程度に達した時点【H15】
 ◎ 平成24年度までを目途【H17】

中期計画

関係閣僚申合せ

その他

18年度実績

I 主要事項に係る計画及び事業の進捗状況

	平成 17 年度 (9月～)	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度以降
施設整備		<p>環境アセスメント 開発許可申請</p> <p>年度内に全手続完了</p> <p>用地取得</p> <p>年度内に 95%完了</p> <p>● 年度内に「造成工事（仮設）」「造成工事（1工区）」「トンネル・立坑（その1）」を 発注 ● 一部仮設工事に着手</p> <p>● 年度内に「造成工事（仮設）」「造成工事（1工区）」「トンネル・立坑（その1）」を 発注 ● 一部仮設工事に着手</p> <p>● 年度内に「造成工事（仮設）」「造成工事（1工区）」「トンネル・立坑（その1）」を 発注 ● 一部仮設工事に着手</p>	<p>造成工事</p>	<p>Lab1 & Center 棟の建築工事（20PI）</p>	
				シーサイド地区の 建築工事	

中期計画

関係機関申合せ

その他

18年度実績

II 1. 銅谷・柳田の2研究ユニットの評価について（評価表1.（1）①）

機構の研究ユニットの評価については、5年間の研究期間の4年次又は5年次に評価を完了するというのがプランである。評価完了時点で、代表研究者（PI）は、引き続き任命されるか否かについての決定の知らせを受けることになる。

銅谷博士と柳田博士は、2004年4月に代表研究者に任命された。これらの2研究ユニットの研究評価については、2006年度中に評価の日程・手順や評価委員会の設置の在り方等に係る検討など、機構内における準備を開始した。これまで所要の調整を進めてきたところであり、評価は研究期間の4年次である2007年度中に予定通り完了することとしている。

理事長は、2007年8月、評価委員会の議長として、2名のノーベル賞受賞者を選任したところである。銅谷ユニットの研究評価は、ヒューマンフロンティアサイエンスプログラムの事務局長であるトーステン・ヴィーゼル博士が、柳田ユニットの研究評価は、英国がん研究所のティム・ハント博士が担当することとなった。

これらの研究評価は、独立して厳格に行われることになる。このことが、最高の国際的な研究プログラムであることを特徴付けるものであり、また、機構の研究プログラムの進捗状況の評価にあたって、高い基準を設定することになる。

II 2. 現在の研究ユニット全体における職員数の内訳（評価表1.（1）③）

別添の表に、機構で採用した外国人スタッフの詳細に関するデータが記されている。

この分野での成功は、沖縄に世界最高水準の国際的な大学院大学を設立するというミッションを達成する中で、2006年度の機構の事業における主要な実績であると考えている。

表で示しているように、2006年4月から2007年3月までの間に、機構の研究部門における外国人スタッフの総数は、7人から17人に増加した。これを全スタッフに占める割合で見ると、12%(7/58)から20%(17/85)に増加したことになる。

若手研究者（表の「1」欄の人数からPIの人数を引いた人数）は、4人から7人に増加した。表を見れば分かるように、この割合の増加は、今年度の第一四半期にも継続しており、本年7月1日時点では、全スタッフのうち27%(28/105)が外国人スタッフであり、うち11人が若手研究者となっている。

PIの採用と若手研究者の採用における成功は、大学院大学設立に向けての教育プログラムとして実施されたワークショップやセミナーの成功の結果成し遂げられたものである。

機構は、2005年9月に正式に発足した。この2年間での多くの外国人及び日本人の優秀なPIや若手研究者の採用実績は、我々の当初の目的以上のものであり、機構の目的達成のために励みとなるものである。

ユニット名	発足年月	2005.9.1		2006.3.31		2006.4.1		2007.3.31		2007.4.1		2007.7.1	
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1 銅谷ユニット	2004.4	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8	1	7
		2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		3	13	2	15	2	15	2	16	2	16	2	14
2 柳田ユニット	2004.4	1	7		7		6		6		6		6
		2	5	1	5	1	5	1	5	1	5	1	6
		3	14	1	14	1	14	1	14	1	14	1	15
3 遠藤ユニット	2004.10	1	2		3	1	3	1	3	1	4	2	5
		2	4		4		4		4		4		4
		3	8		8	1	9	1	9	1	10	2	11
4 外村ユニット	2005.3	1	2		2		3		3		3		3
		2											
		3	2		2		3		3		3		3
5 ブレナーユニット	2005.12	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1
		2					1		2		4		4
		3			1	1	2	1	3	1	5	1	5
6 丸山ユニット	2005.12	1			3		6	1	8	2	8	2	9
		2			2		3		3		3		3
		3			5		9	1	14	2	14	2	14
7 内藤ユニット	2005.12	1			2	1	3	1	5	1	5	1	5
		2			1		3		3		3		3
		3			3	1	6	1	8	1	9	1	9
8 ソックレアユニット	2006.7	1							1	1	1	1	2
		2											
		3							1	1	1	1	3
9 政井ユニット	2006.10	1							4		5		5
		2							2		3		3
		3							6		8		8
10 シュティールユニット	2006.11	1							1	1	1	1	1
		2							2	2	2	2	2
		3							3	3	3	3	3
11 ウィックソユニット	2007.1	1							3	2	3	2	4
		2											
		3							5	2	5	2	6
12 トリップユニット	2007.1	1							1	1	1	1	1
		2											
		3							1	1	1	1	1
13 アーバースノットユニット	2007.1	1							2	2	2	2	2
		2											
		3							2	2	2	2	2
14 デュッダユニット	2007.4	1									1	1	1
		2									1	1	3
		3									2	2	4
15 サマテユニット	2007.4	1									1	1	1
		2									1		1
		3									2	1	2
16 高橋ユニット	2007.4	1									3		3
		2											
		3									3		3
17 プライスユニット	2007.5	1											2
		2											
		3											2
総計		1	19	1	26	4	30	5	46	13	53	16	58
		2	10	2	13	2	17	2	22	4	27	5	30
		3	37	3	48	6	58	7	85	17	98	21	105

(注)

1：代表研究者、グループリーダー、研究員の人数 赤字は内数としての外国人数（2及び3も同様）

2：技術員の数

3：各ユニットにおける人員総数

II 3. ワークショップやセミナーの開催状況について（評価表1.（3）②）

以下のワークショップのアンケート結果（抜粋）を添付する。

① 一分子解析 (21 ページ参照)

日時：平成18年4月17日～21日

オーガナイザー：難波啓一博士、佐甲靖之博士、石嶋秋彦博士

場所：万国津梁館（名護市）

② 沖縄計算神経科学コース OCNC2006 (22 ページ参照)

日時：平成18年6月26日～7月6日

オーガナイザー：銅谷賢治博士（機構代表研究者）

場所：OIST シーサイドハウス（恩納村）